

エアシリンダ駆動システム 全ストローク時間および終端速度

グラフの見方

シリンダ駆動システムを最適な機器で構成したときの全ストローク時間および終端速度を表したグラフです。

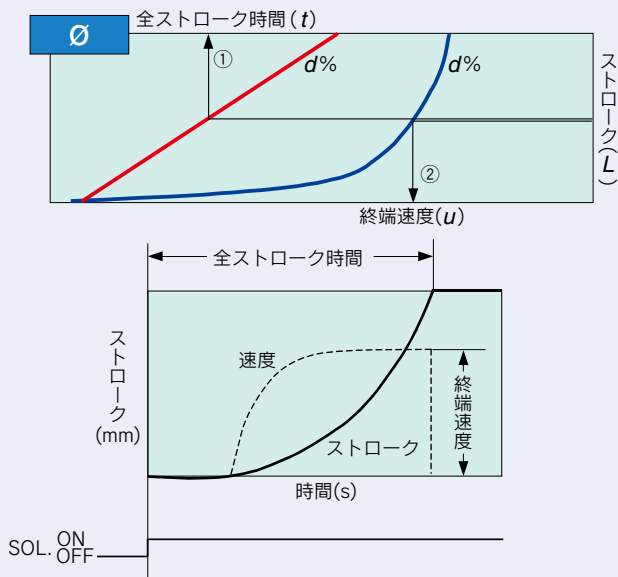
下図のようにシリンダチューブ内径ごとに種々の負荷割合とストロークに対応する全ストローク時間および終端速度を示してあります。

条件

圧力	0.5MPa	
配管長さ	1m	CJ2シリーズ、CM2シリーズ、CQ2シリーズ
	2m	MBシリーズ、CQ2シリーズ
	3m	CS1シリーズ、CS2シリーズ
シリンダの向き	垂直上向	
スピードコントローラ	メータアウト、シリンダ直結、ニードル全開	
負荷割合	((負荷質量×9.8)/理論出力)×100%	

例

シリンダチューブ内径が ϕ 、ストロークが L 、負荷割合が $d\%$ のときは、全ストローク時間 t は矢印①通り、縦座標 L が $d\%$ の全ストローク線(赤線)に当たる点の上方横座標の値を読み取って求められ、終端速度 u は矢印②通り、縦座標 L が $d\%$ の終端速度線(青線)に当たる点の下方横座標の値を読み取って求められます。



シリンダの作動特性に関する用語説明

(1)ピストン始動時間(start up time)

電磁弁を通电(非通电)してから、シリンダのピストン(ロッド)が動き始めるまでの時間。正確な判定は、加速度曲線の立ち上がりで行います。

(2)全ストローク時間(full stroke time)

電磁弁を通电(非通电)してから、シリンダのピストン(ロッド)がストローク終端に到達するまでの時間。

(3)90%出力時間(90% force time)

電磁弁を通电(非通电)してから、シリンダ出力が理論出力の90%に到達するまでの時間。

(4)平均速度(mean velocity)

「全ストローク時間」でストロークを割った値。シーケンスダイヤグラムにおいて、「全ストローク時間」の代用表現として用います。

(5)最大速度(max. velocity)

ストローク中に発生するピストン速度の最大値。図1の場合は「終端速度」と等しい値となります。図2のように、飛び出しやスティックスリップが発生する場合には、かなり大きな値を示します。

(6)終端速度(stroke end velocity)

シリンダのピストン(ロッド)が、ストローク終端に到達するときのピストン速度。調整式クッションをもつシリンダの場合は、クッション入口におけるピストン速度をいいます。クッション能力の判定および緩衝機構の選定に用います。

(7)衝突速度(impact velocity)

シリンダのピストン(ロッド)が、ストローク終端あるいは任意位置において外部ストッパに衝突するときのピストン速度。

(参考)

平衡速度:十分に長いストロークのシリンダをメータアウト駆動すると、ストローク後半は等速運動状態となります。このときのピストン速度は、供給圧力や負荷にかかわらず、排気回路の有効断面積 S [mm²]とピストン面積 A [mm²]だけに依存し、平衡速度 $=1.9 \times 10^5 \times (S/A)$ [mm/s]により概算されます。

注)これらの定義は、当社の「機器選定プログラム」と整合しています。

図1

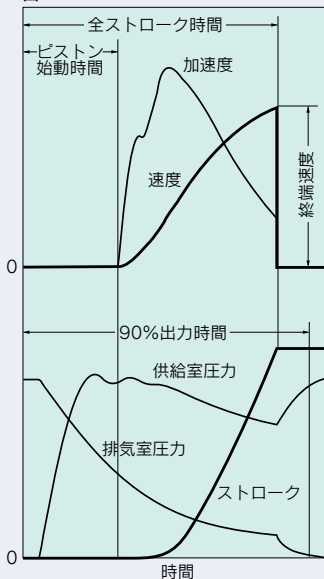
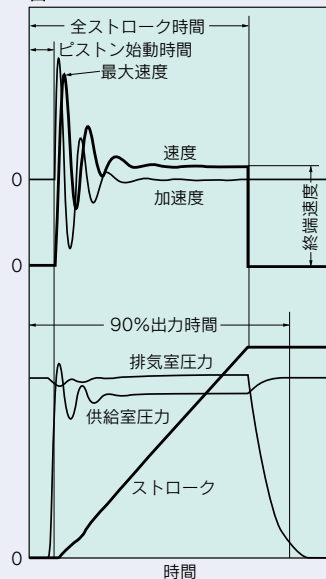
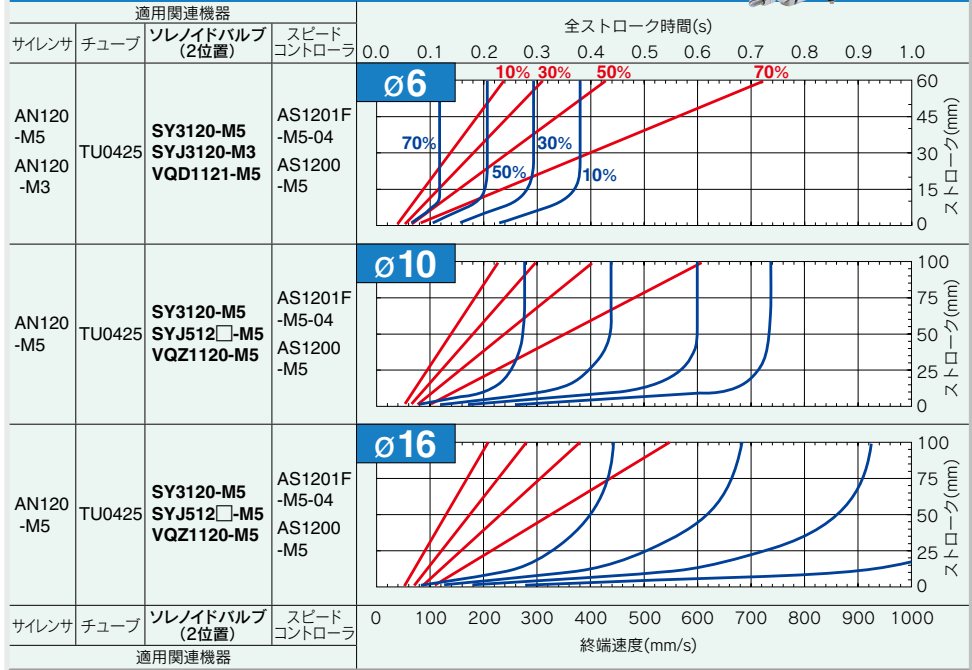


図2



エアシリンダ駆動システム 全ストローク時間および終端速度

CJ2 Series / チューブ内径: $\phi 6, \phi 10, \phi 16$



各種条件に対する詳細につきましては、当社ホームページの機器選定プログラムをご利用のうえ、ご判断ください。

グラフの見方

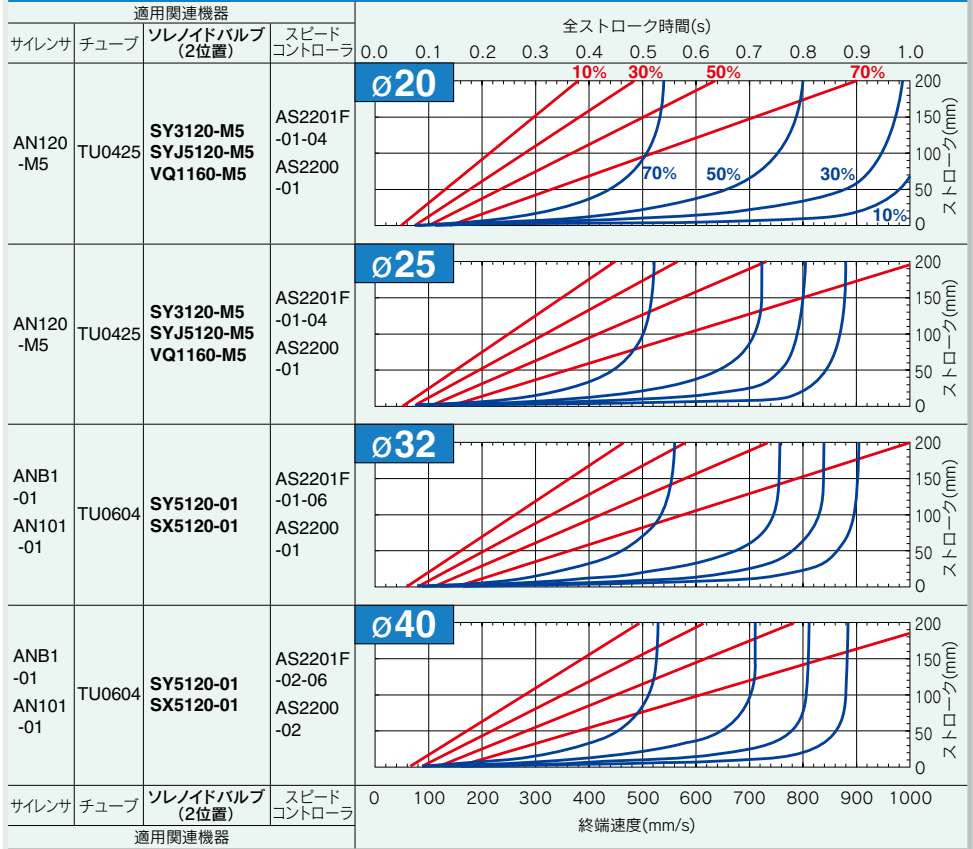
シリンダ駆動システムを最適な機器で構成したときの全ストローク時間および終端速度を表したグラフです。右図のようにシリンダチューブ内径ごとに種々の負荷割合とストロークに対応する全ストローク時間および終端速度を示してあります。

条件

圧力	0.5MPa
配管長さ	1m
シリンダの向き	垂直上向
スピードコントローラ	メータアウト、シリンダ直結、ニードル全開
負荷割合	((負荷質量×9.8)/理論出力)×100%



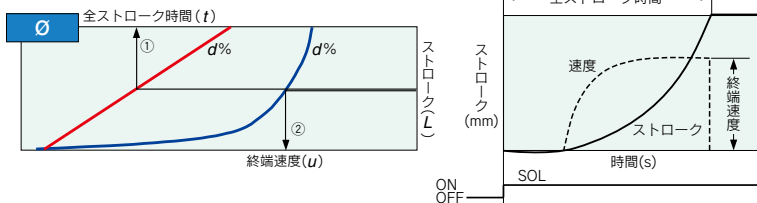
CM2 Series / チューブ内径: $\phi 20, \phi 25, \phi 32, \phi 40$



各種条件に対する詳細につきましては、当社ホームページの機器選定プログラムをご利用のうえ、ご判断ください。

例

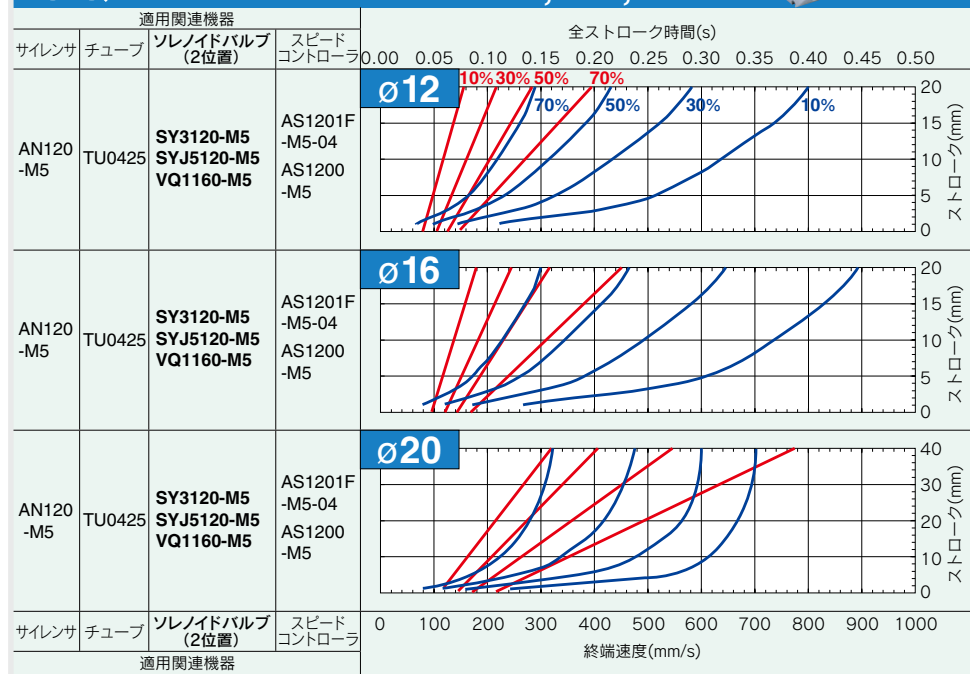
シリンダチューブ内径が ϕ 、ストロークが L 、負荷割合が $d\%$ のときは、全ストローク時間 t は矢印①通り、縦座標 L が $d\%$ の全ストローク線(赤線)に当たる点の上方横座標の値を読み取って求められ、終端速度 u は矢印②通り、縦座標 L が $d\%$ の終端速度線(青線)に当たる点の下方横座標の値を読み取って求められます。



エアシリンダ駆動システム 全ストローク時間および終端速度



CQ2 Series / チューブ内径: $\phi 12, \phi 16, \phi 20$



各種条件に対する詳細につきましては、当社ホームページの機器選定プログラムをご利用のうえ、ご判断ください。

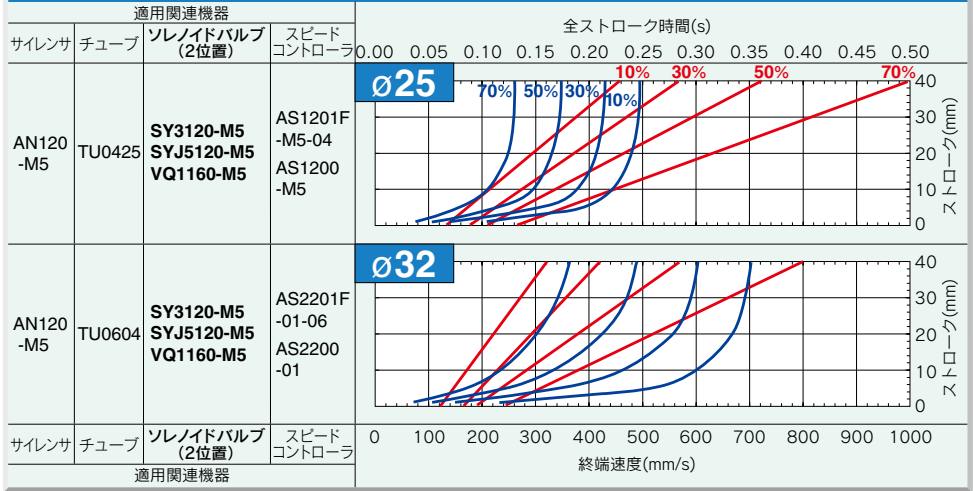
グラフの見方

シリンダ駆動システムを最適な機器で構成したときの全ストローク時間および終端速度を表したグラフです。右図のようにシリンダチューブ内径ごとに種々の負荷割合とストロークに対応する全ストローク時間および終端速度を示してあります。

条件

圧力	0.5MPa
配管長さ	1m
シリンダの向き	垂直上向
スピードコントローラ	メータアウト、シリンダ直結、ニードル全開
負荷割合	$((\text{負荷質量} \times 9.8) / \text{理論出力}) \times 100\%$

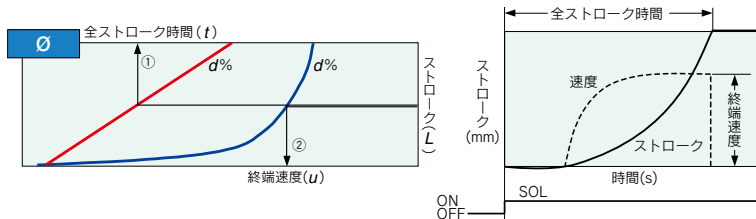
CQ2 Series / チューブ内径: $\phi 25, \phi 32$



各種条件に対する詳細につきましては、当社ホームページの機器選定プログラムをご利用のうえ、ご判断ください。

例

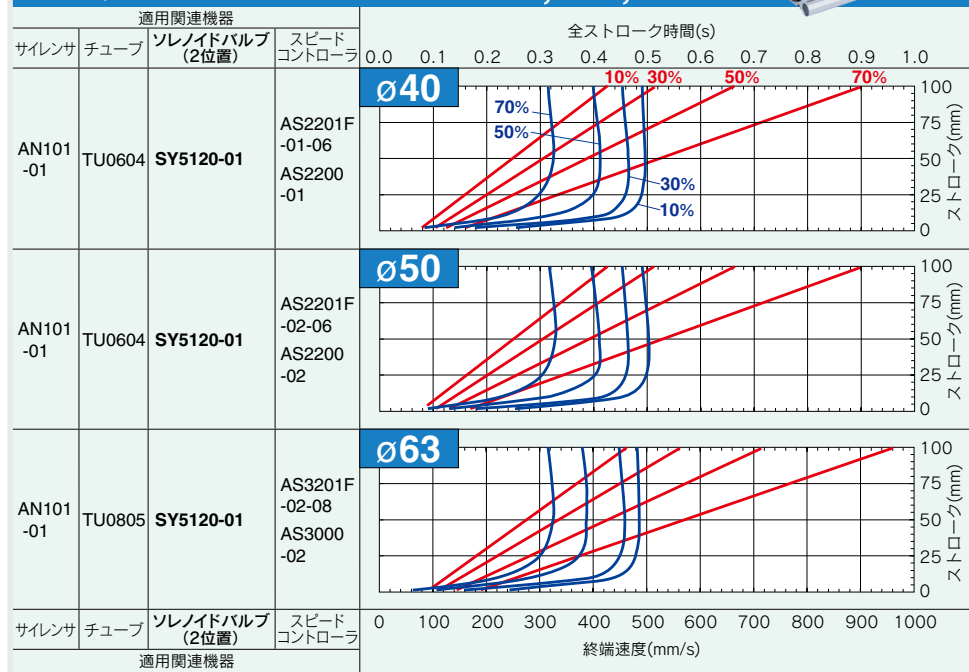
シリンダチューブ内径が ϕ 、ストロークが L 、負荷割合が $d\%$ のときは、全ストローク時間 t は矢印①通り、縦座標 L が $d\%$ の全ストローク線(赤線)に当たる点の上方横座標の値を読み取って求められ、終端速度 u は矢印②通り、縦座標 L が $d\%$ の終端速度線(青線)に当たる点の下方横座標の値を読み取って求められます。



エアシリンダ駆動システム 全ストローク時間および終端速度



CQ2 Series / チューブ内径: $\phi 40, \phi 50, \phi 63$



各種条件に対する詳細につきましては、当社ホームページの機器選定プログラムをご利用のうえ、ご判断ください。

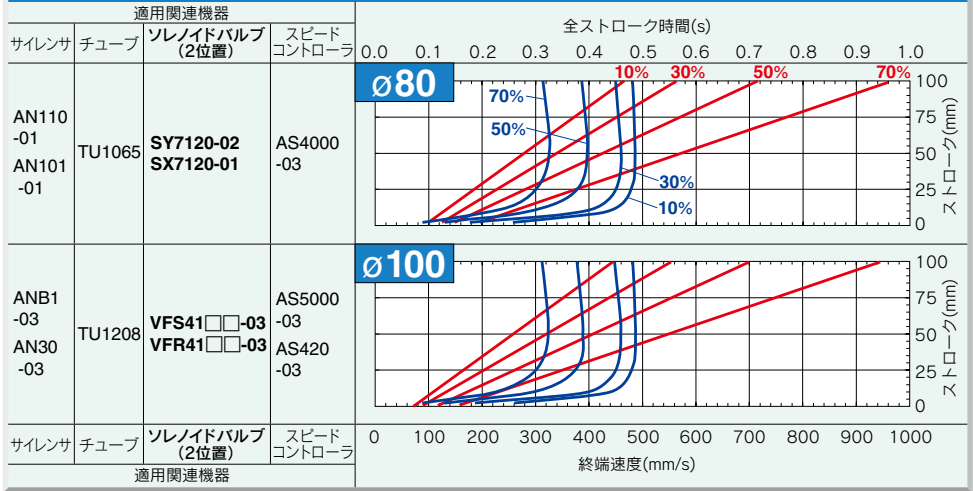
グラフの見方

シリンダ駆動システムを最適な機器で構成したときの全ストローク時間および終端速度を表したグラフです。右図のようにシリンダチューブ内径ごとに種々の負荷割合とストロークに対応する全ストローク時間および終端速度を示してあります。

条件

圧力	0.5MPa
配管長さ	2m
シリンダの向き	垂直上向
スピードコントローラ	メータアウト、シリンダ直結、ニードル全開
負荷割合	$((\text{負荷質量} \times 9.8) / \text{理論出力}) \times 100\%$

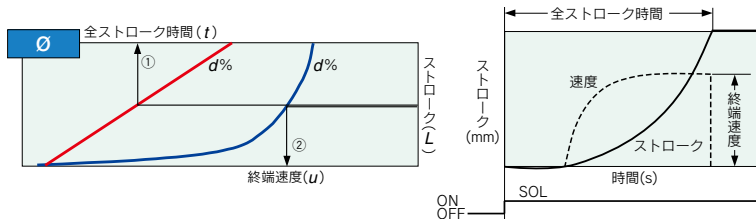
CQ2 Series / チューブ内径: $\phi 80, \phi 100$



各種条件に対する詳細につきましては、当社ホームページの機器選定プログラムをご利用のうえ、ご判断ください。

例

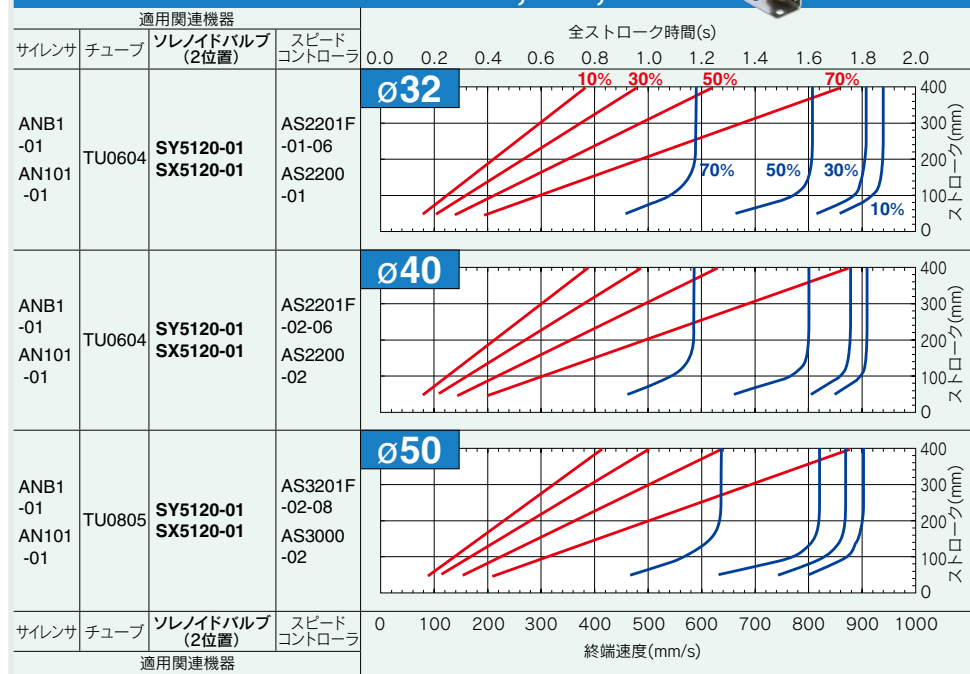
シリンダチューブ内径が ϕ 、ストロークが L 、負荷割合が $d\%$ のときは、全ストローク時間 t は矢印①通り、縦座標 L が $d\%$ の全ストローク線(赤線)に当たる点の上方横座標の値を読み取って求められ、終端速度 u は矢印②通り、縦座標 L が $d\%$ の終端速度線(青線)に当たる点の下方横座標の値を読み取って求められます。



エアシリンダ駆動システム 全ストローク時間および終端速度



MB Series / チューブ内径：φ32,φ40,φ50



各種条件に対する詳細につきましては、当社ホームページの機器選定プログラムをご利用のうえ、ご判断ください。

グラフの見方

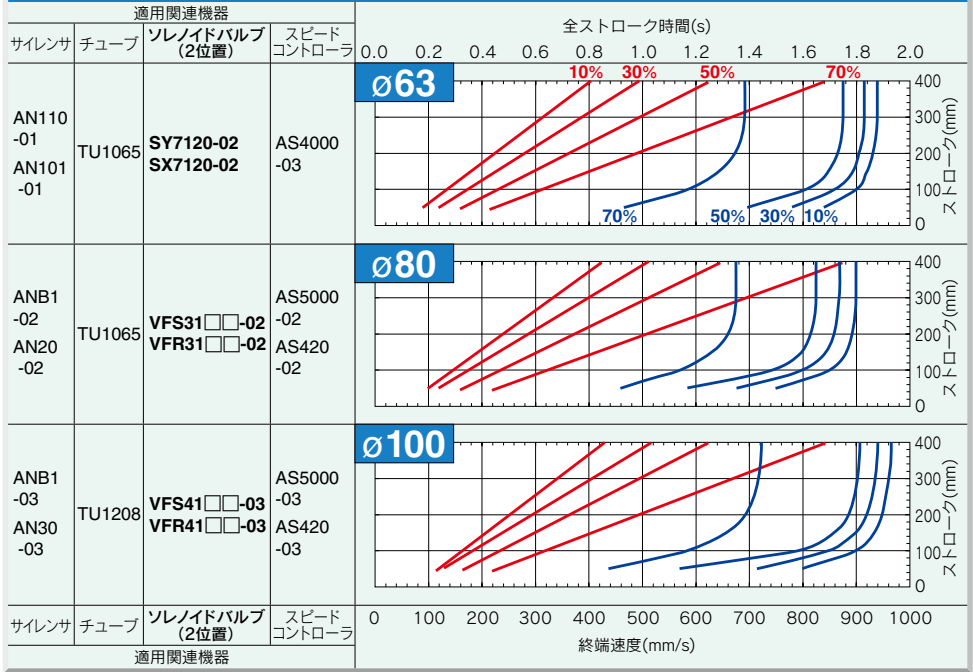
シリンダ駆動システムを最適な機器で構成したときの全ストローク時間および終端速度を表したグラフです。

右図のようにシリンダチューブ内径ごとに種々の負荷割合とストロークに対応する全ストローク時間および終端速度を示してあります。

条件

圧力	0.5MPa
配管長さ	2m
シリンダの向き	垂直向上
スピードコントローラ	メータアウト、シリンダ直結、ニードル全開
負荷割合	((負荷質量×9.8)/理論出力)×100%

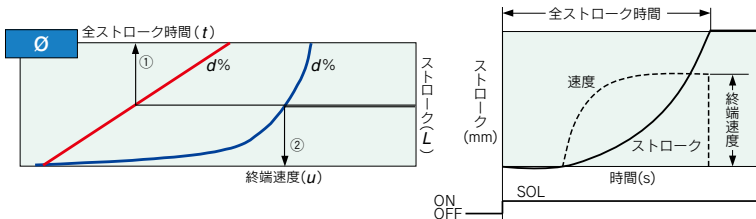
MB Series / チューブ内径: $\phi 63, \phi 80, \phi 100$



各種条件に対する詳細につきましては、当社ホームページの機器選定プログラムをご利用のうえ、ご判断ください。

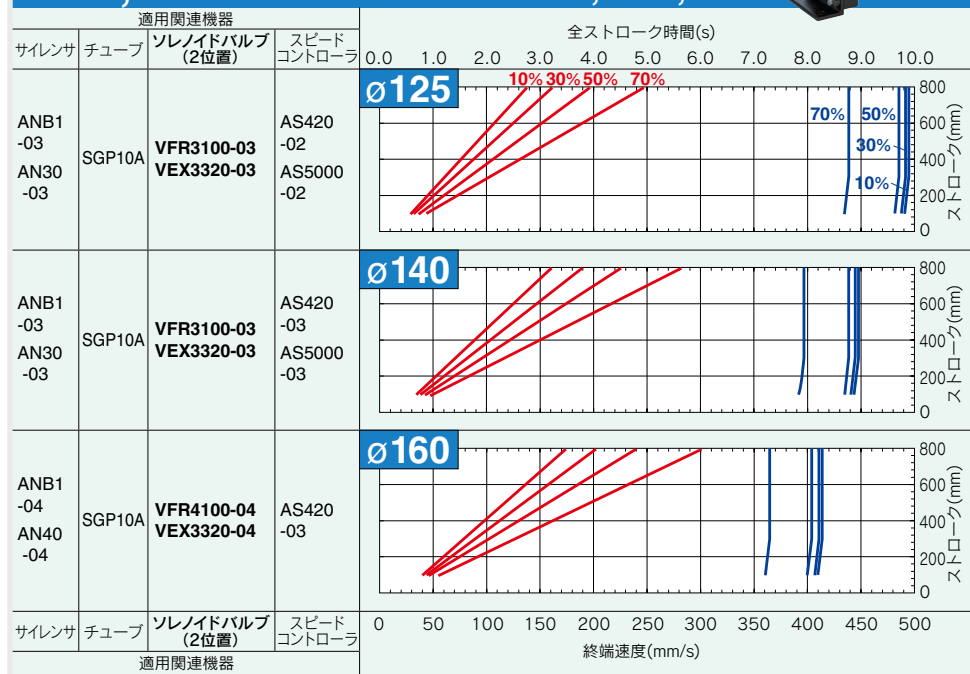
例

シリンダチューブ内径が ϕ 、ストロークが L 、負荷割合が $d\%$ のときは、全ストローク時間 t は矢印①通り、縦座標 L が $d\%$ の全ストローク線(赤線)に当たる点の上方横座標の値を読み取って求められ、終端速度 u は矢印②通り、縦座標 L が $d\%$ の終端速度線(青線)に当たる点の下方横座標の値を読み取って求められます。



エアシリンダ駆動システム 全ストローク時間および終端速度

CS1, CS2 Series / チューブ内径: $\phi 125, \phi 140, \phi 160$



各種条件に対する詳細につきましては、当社ホームページの機器選定プログラムをご利用のうえ、ご判断ください。

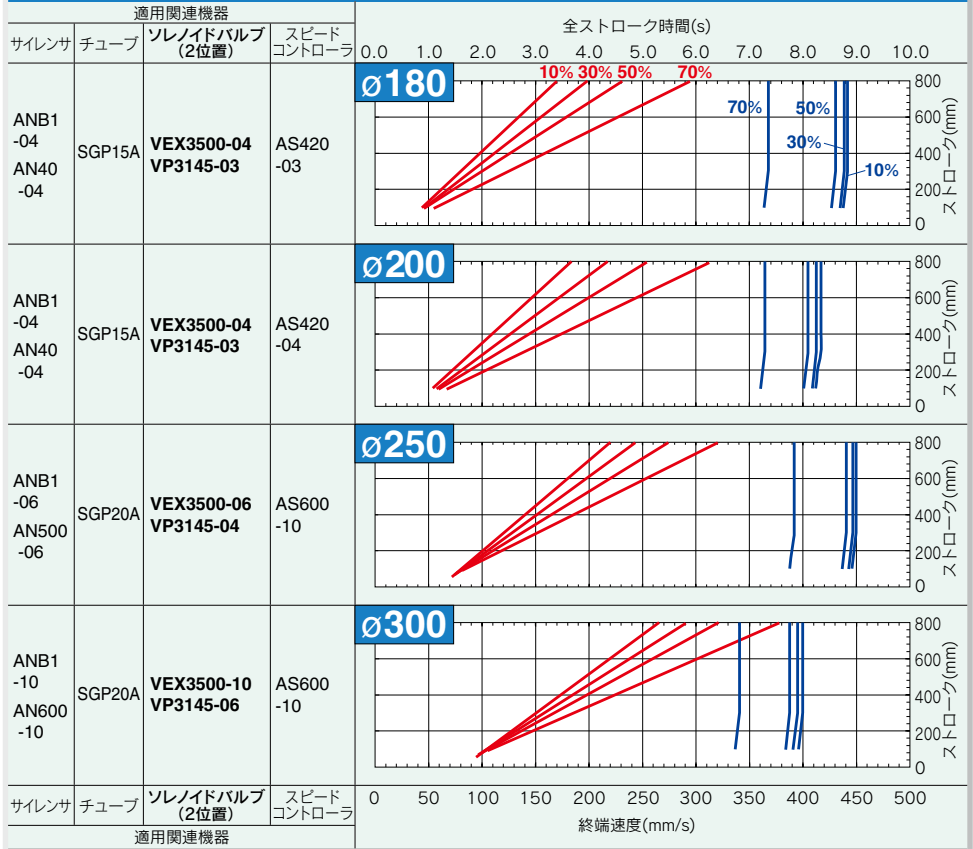
グラフの見方

シリンダ駆動システムを最適な機器で構成したときの全ストローク時間および終端速度を表したグラフです。右図のようにシリンダチューブ内径ごとに種々の負荷割合とストロークに対応する全ストローク時間および終端速度を示してあります。

条件

圧力	0.5MPa
配管長さ	3m
シリンダの向き	垂直向上
スピードコントローラ	メータアウト、シリンダ直結、ニードル全開
負荷割合	((負荷質量×9.8)/理論出力)×100%

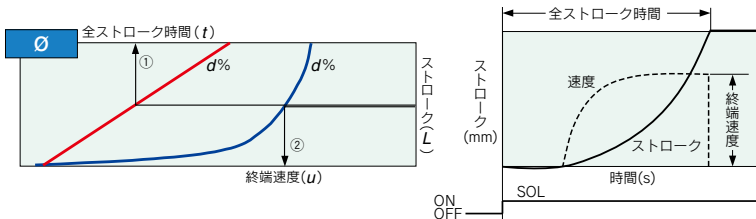
CS1 Series / チューブ内径: $\phi 180, \phi 200, \phi 250, \phi 300$



各種条件に対する詳細につきましては、当社ホームページの機器選定プログラムをご利用のうえ、ご判断ください。

例

シリンダチューブ内径が ϕ 、ストロークが L 、負荷割合が $d\%$ のときは、全ストローク時間 t は矢印①通り、縦座標 L が $d\%$ の全ストローク線(赤線)に当たる点の上方横座標の値を読み取って求められ、終端速度 u は矢印②通り、縦座標 L が $d\%$ の終端速度線(青線)に当たる点の下方横座標の値を読み取って求められます。



電磁弁流量特性 (流量特性の表示方法)

1. 流量特性の表示

電磁弁などの機器の仕様欄における流量特性の表示は、表 1 によります。

表 1. 流量特性の表示

対象機器	国際規格による表示	他の表示	準拠規格
空気圧用機器	C、b		ISO 6358:1989 JIS B 8390:2000
		S	JIS B 8390:2000 機器:JIS B 8373、8374、8379、8381
	Cv	ANSI/(NFPA)T3.21.3:1990	

2. 空気圧用機器

2.1 国際規格による表示

(1) 準拠規格

ISO 6358:1989 : Pneumatic fluid power-Components using compressible fluids-Determination of flow-rate characteristics

JIS B 8390:2000 : 空気圧-圧縮性流体用機器-流量特性の試験方法

(2) 流量特性の定義

音速コンダクタンス C と臨界圧力比 b の対によって、流量特性を表示します。

音速コンダクタンス C : チョーク流れ状態の機器の通過質量流量を、上流絶対圧力と標準状態の密度の積で割った値。(sonic conductance)

臨界圧力比 b : この値より小さいとチョーク流れになる圧力比(下流圧力/上流圧力)。(critical pressure ratio)

チョーク流れ : 上流圧力が下流圧力に対して高く、機器のある部分で速度が音速に達している流れ。

気体の質量流量は上流圧力に比例し、下流圧力には依存しない。(choked flow)

亜音速流れ : 臨界圧力比以上における流れ。(subsonic flow)

標準状態 : 温度20℃、絶対圧力0.1MPa(=100kPa=1bar)、相対湿度65%の空気の状態。空気量の単位の後に略号(ANR)をつけて表記する。(standard reference atmosphere)

準拠規格:ISO 8778:1990 Pneumatic fluid power-Standard reference atmosphere、JIS B 8393:2000:空気圧-標準参考空気

(3) 流量計算式

実用単位により次のように表されます。

$$\frac{P_2+0.1}{P_1+0.1} \leq b \text{ のとき、チョーク流れ}$$

$$Q = 600 \times C(P_1+0.1) \sqrt{\frac{293}{273+t}} \dots\dots\dots (1)$$

$$\frac{P_2+0.1}{P_1+0.1} > b \text{ のとき、亜音速流れ}$$

$$Q = 600 \times C (P_1 + 0.1) \sqrt{1 - \left[\frac{P_2 + 0.1}{P_1 + 0.1} - b \right]^2} \sqrt{\frac{293}{273 + t}} \dots\dots\dots(2)$$

Q: 空気流量 [dm³/min(ANR)], SI単位のdm³(立方デシメートル)は、L(リットル)で表してもよいことになっています。1dm³=1L。

C: 音速コンダクタンス [dm³/(s·bar)]

b: 臨界圧力比 [-]

P₁: 上流圧力 [MPa]

P₂: 下流圧力 [MPa]

t: 温度 [°C]

注) 亜音速流れの式は楕円近似曲線です。

流量特性線図を図1に示します。詳しくは、当社の「省エネプログラム」をご利用ください。

例)

C=2 [dm³/(s·bar)], b=0.3の電磁弁でP₁=0.4 [MPa], P₂=0.3 [MPa], t=20 [°C]のときの空気流量を求める。

式(1)より最大流量 = $600 \times 2 \times (0.4 + 0.1) \times \sqrt{\frac{293}{273 + 20}} = 600$ [dm³/min(ANR)]

圧力比 = $\frac{0.3 + 0.1}{0.4 + 0.1} = 0.8$

図1より圧力比0.8でb=0.3の流量比を読み取ると0.7。

流量 = 最大流量 × 流量比 = 600 × 0.7 = 420 [dm³/min(ANR)]となる

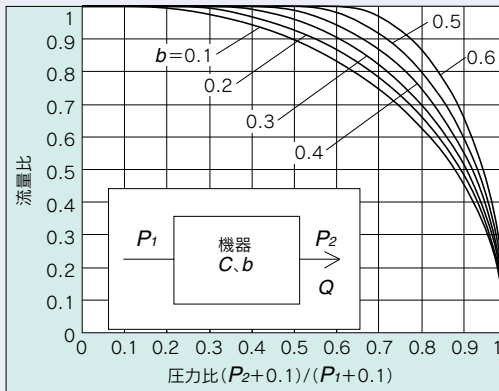


図1. 流量特性線図

電磁弁流量特性 (流量特性の表示方法)

2.1 国際規格による表示

(4) 試験方法

図2に示す試験回路に供試機器を配管接続し、上流圧力を0.3MPaを下回らない一定値に維持しつつ、まず飽和する最大流量を測定します。次いでこの流量の80%、60%、40%、20%点の流量と上流圧力、下流圧力を測定します。そして、この最大流量から音速コンダクタンス C を算出します。また他の各データを亜音速流れの式に代入して b を算出し、その平均値から臨界圧力比 b を求めます。

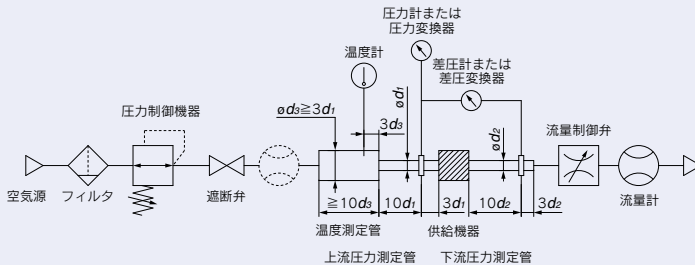


図2. ISO6358、JIS B 8390 の試験回路

2.2 有効断面積 S

(1) 準拠規格

JIS B 8390:2000:空気圧-圧縮性流体用機器-流量特性の試験方法

機器規格: JIS B 8373:空気圧用2ポート電磁弁

JIS B 8374:空気圧用3ポート電磁弁

JIS B 8379:空気圧用消音器

JIS B 8381:空気圧用たわみ管の管継手

(2) 流量特性の定義

有効断面積 S : 空気タンクに取り付けた機器からチョーク流れの状態で圧縮空気を放出したとき、空気タンク内の圧力変化から計算で導いた摩擦や縮流のない理想的な絞りの断面積。音速コンダクタンス C と同じ「流れやすさ」を代表する概念です。(effective area)

(3) 流量計算式

$\frac{P_2+0.1}{P_1+0.1} \leq 0.5$ のとき、**チョーク流れ**

$$Q = 120 \times S(P_1+0.1) \sqrt{\frac{293}{273+t}} \quad \dots\dots\dots (3)$$

$\frac{P_2+0.1}{P_1+0.1} > 0.5$ のとき、**亜音速流れ**

$$Q = 240 \times S \sqrt{(P_2+0.1)(P_1-P_2)} \sqrt{\frac{293}{273+t}} \quad \dots\dots\dots (4)$$

音速コンダクタンス C との換算:

$$S = 5.0 \times C \quad \dots\dots\dots (5)$$

Q : 空気流量 [dm³/min(ANR)], SI単位のdm³(立方デシメートル)は、L(リットル)で表してもよいことになって
ています。1dm³=1L。

S : 有効断面積 [mm²]

P_1 : 上流圧力 [MPa]

P_2 : 下流圧力 [MPa]

t : 温度 [°C]

注) 亜音速流れの式(4)は、音速コンダクタンス C による式(2)において、 $b=0.5$ の場合と同一です。

(4) 試験方法

図3に示す試験回路に供試機器を配管接続し、0.6MPaを下回らない一定圧力(0.5MPa)に圧縮空気が充填された空気タンクから、空気タンク内圧力が0.25MPa(0.2MPa)に下がるまで空気を大気に放出します。この時の放出時間と定常値になるまで放置した後の空気タンク内の残存圧力を測定し、次の式により有効断面積 S を算出します。空気タンクの容積は供試機器の有効断面積に対応して規定の範囲で選定します。JIS B 8373, 8374, 8379, 8381の場合、圧力値はカッコ内、式の係数は12.9です。

$$S = 12.1 \frac{V}{t} \log_{10} \left(\frac{P_s + 0.1}{P + 0.1} \right) \sqrt{\frac{293}{T}} \dots \dots (6)$$

S : 有効断面積 [mm²]

V : 空気タンク容積 [dm³]

t : 放出時間 [s]

P_s : 放出前の空気タンク内圧力 [MPa]

P : 放出後の空気タンク内残存圧力 [MPa]

T : 放出前の空気タンク内温度 [K]

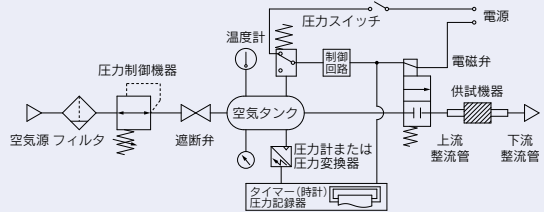


図3. JIS B 8390 の試験回路

2.3 容量係数 C_v 値

アメリカ規格ANSI/(NFPA)T3.21.3:1990:Pneumatic fluid power-Flow rating test procedure and reporting method-For fixed orifice components

は、ISO6358と類似する試験回路における試験により、容量係数(flow coefficient) C_v 値を次の式で定義しています。

$$C_v = \frac{Q}{114.5 \sqrt{\frac{\Delta P(P_2 + P_a)}{T_1}}} \dots \dots (7)$$

ΔP : 静圧取出し口間の圧力降下 [bar]

P_1 : 上流取出し口の圧力 [barゲージ]

P_2 : 下流取出し口の圧力 [barゲージ]: $P_2 = P_1 - \Delta P$

Q : 流量 [dm³/s標準状態]

P_a : 大気圧 [bar絶対]

T_1 : 上流絶対温度 [K]

試験条件は、 $P_1 + P_a = 6.5 \pm 0.2$ bar絶対、 $T_1 = 297 \pm 5$ K、 0.07 bar $\leq \Delta P \leq 0.14$ barです。

これは、圧力降下が上流圧力に対して小さく、空気の圧縮性が問題とならない場合のみ適用するとしてISO6358が記載している有効流路面積(effective area) A と同様の概念です。